



サーカスに^{つど}集^{かい}う^{ぶつ}怪物たち

ノプロプス
noprops / 原作

くろだけんじ
黒田研二 / 著

すずらぎ
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぜ解きが得意。

たけし

南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。

タケル

ビジョン・フリーゼという種類の犬。大切な人々を助けるために、怪物と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているという事実を知ったひろしの提案で、モールス信号を応用し、言葉を伝えられるようになった。

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



怪物



ブルーベリー色の巨人。人間を見るとおそいかかってくる。ひろしたちはこの夏、「ジェイルハウス」などあらゆる場所での怪物に遭遇したが、犬が苦手であることや、頭が重く泳ぐことができないなどの弱点を突くかたちで、なんとか魔の手を逃れてきた。宇宙から飛来した物質・ブルースターの中に入っていた虫「パラサイトバグ」が体内に入ることが原因で、人間が怪物に変異する可能性があることがわかってきた。

メサイア

ブルーデーモンを増やすため、パラサイトバグを手下たちに集めさせている。目的を達成するためなら、手段を問わない冷酷さを持つ。

ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。



ハルナ先生 せんせい

ひろし達たちが通うかよ北部小学校ほくぶしょうがっこうの教師きょうし。生徒せいとたちが多数失跡さうしつじょうし、閉鎖へいさされることになった碧奥へきおく小学校しょうがっこうの元・生徒もとせいとでもある。クロさんの悪事あくじを知り、ひろしたちに協力きょうりょくしてくれる。行き場いを失うっていた親友しんゆうのユズキを迎え入れ、家で一緒に暮らしている。



クロさん

怪物かいぶつのことを「ブルーデーモン」と呼び、宇宙うちゅうから飛来ひらいしたブルースターを集め、この世界せかいをブルーデーモンだらけにすることをもくろんでいる。自らもブルーデーモン化めできる能力のうりょくを得た。



ユズキ

ハルナ先生せんせいの同級生どうきゅうせいとして碧奥へきおく小学校しょうがっこうに通っていたが、パラサイトバグを誤あやまって口にしてしまい、ブルーデーモンになった。現在げんざいは力をコントロールできなくなるようになり、人間にんげんだった頃の姿すがたにも変身へんしんできる。



目次もくじ

- 1 ほくはタケル 006
- 2 消えたハルナ先生せんせい 013
- 3 ウサギを追いかけて 021
- 4 奈落の底から 030
- 5 クロさんの思惑おもわく 040
- 6 似たもの同士どうし 051
- 7 メサイアには関わるなかか 061
- 8 ショーの始まりはじ 073
- 9 地獄行きのカウントダウンかいじ 081

- 10 絶体絶命のハルナ先生ぜんたいぜんめい 092
- 11 現れたヒーローあらわ 101
- 12 〈わくわくサーカス団〉の団長さんだん 110
- 13 美香ちゃんとたけし君みか 120
- 14 おびえるライオン 128
- 15 レオンの暴走ぼうそう 140
- 16 ショーの終わりお 148
- 17 みんなの気持ちきもち 158
- ひろしによるなぞの解説かいせつ 173

1 ぼくはタケル

目を覚ます。

ぼくは暗やみの中にいた。

ぐるりと周囲を見回したが、なにも見えない。真つ暗な箱の中に閉じこめられているような感覚だ。

昔、今と同じように暗やみの中で目を覚ましたことを思い出す。不安な気持ちでいっぱいになりながら鼻を鳴らすと、おひさまの光に似たにおいがどこからかただよつてきたつけ。

あのとぎ、ぼくは毛布のかかったカゴに入れられ、車で新しい家に向かうとちゆうだった。急にあたりが明るくなり、頭上から優しい男性が顔をのぞかせる。それがおひさまとの初めての出会いだ。おひさまの光のようなにおいはお父さんから発せられたものだった。

『タケルちゃんの様子はどう？』

前方から女性の声が聞こえた。お母さんだ。

『タケルって……このワンコのこと？』

ぼくの頭をやさしくなでながらお父さんがきく。

『もう名前をつけちゃったのかい？』

『りりしい顔だちと真つ白な毛なみがどことなくヤマトタケルノミコトの姿に似ているから、タケルにしたの』

お母さんはそう説明した。

当時、まだ幼かったぼくには、ヤマトタケルノミコトというものがなんなのかよくわかっていなかったけど、タケルという名前のひびきはかつこよくてすぐに気に入った。

『おまえは今日からタケルだとさ』

そう口にしたお父さんの手をぺろりとなめてしつぽをふる。

『おまえの考えた名前、気に入ってくれたみたいだぞ』

ついさつきまでかかえていた不安な気持ちには、お父さんの笑顔を見たたん、どこかへふき飛んでしまった。

……生まれて間もないころの出来事なので、お父さんとお母さんに初めて出会ったときのことなんて、これまですっかり忘れてしまっていた。

昔のことをなつかしく思い返しながら、ワン、とお父さんを呼ぶ。しかし、お父さんの返事は

ない。あのときみたいに頭上からまぶしい光が射しこむこともなかった。

あたりのにおいをかいでみたが、鼻の奥にはしびれるような感覚が残っていて、うまく機能してくれない。

ああ……そうだ。

前あしで鼻をこすり続けるうちに、ようやく思い出す。

ここは市立図書館前の公園に設営されたサーカス広場。今日から一週間、へわくわくサーカス団の公演が予定されている。

サーカスを観にやってきた卓郎君と美香ちゃんは、客席にクロさんの姿を見かけた。クロさんはぼくたちの敵だ。クロさんのわなにはまって、これまで何度危険な目にあわされてきたことか。

ここにはたくさんの動物がいる。クロさんのねらいはおそらく、へわくわくサーカス団で一番人気をほこるホワイトライオンのレオンにちがいない。レオンをさらってパラサイトバグを飲ませるつもりなのだろう。

体内にパラサイトバグを取りこんだ動物は、ひふが青くなり、からだは巨大化して、ブルーデーモンへと変化する。もともと力があり、するどいきばとつめを持つライオンがブルーデーモンになったら、だれもたちうちできない。史上最強のモンスターが生まれることになってしまう。

そんなことは絶対にゆるされない。

学級新聞の取材で動物園へやってきていたひろし君、ナオちゃん、ユズキちゃん、ハルナ先生、そしてぼくは、動物園を飛び出して図書館前の公園に向かい、卓郎君たちと合流した。

サーカスの開演時刻がせまる中、ぼくたちは三つのグループに分かれてクロさんのたくらみを阻止しようとした。

卓郎君と美香ちゃんは観客席からあやしい人物を探し、ひろし君とユズキちゃんはサーカスが行われる巨大テントの外を搜索。ハルナ先生とナオちゃんは動物のいるテントの前を交代で見張り続けていた。

交代の時間になつてもなかなか帰つてこないナオちゃんを心配するハルナ先生に、サーカス団のジャージを着た人物が声をかける。ナオちゃんは気分が悪くなつてテントで休んでいるというのだ。

ハルナ先生はその言葉をまるで疑うことなく、アイマスクで顔をかくしたその団員さんについていった。

だけど、団員さんの話はどこかおかしい。ぼくはついさつき、ナオちゃんがあやしい人かげを追つて公園のほうへ走つていく姿を目撃していたのだ。もしそのとちゅうで気分が悪くなつたの

だとしても、そんなに早くテントまで移動できるはずがない。

もしかしてわな？

ぼくはハルナ先生にそのことを報せようとしたが、か
けだす直前に鼻と口を何者かにふさがれてしまった。

鼻の奥がしびれ、それつきりなにもわからなくなつて

……そして、気がついたらこの状況だ。

ぼくはゆつくりと立ち上がり、あしを一本ずつ動かしてみた。

大丈夫。ちゃんと動かし痛みもない。どこもけがはしていないようだ。

まずはここから脱出しなくてはならない。

前あしで壁にふれる。決してやわらかくはないが、つめでひっかければ傷がつきそうな材質だ。

まだ鼻は完全には治っていなかったが、息を吸いこむとかすかにヒノキのにおいがした。どうやら、ぼくは木箱の中に閉じこめられているらしい。

箱だとしたら、どこかにふたがあつて、中からおせばきつと開くはずだ。

ぼくは肉球をあちこちにおしつけたが、手ごたえはなかった。



ため息をはき出しながら、頭上を見上げる。後ろあしで立ち、前あしを思いきり頭上へのぼし
てみたけれど、天井にはやつとつめの先が届く程度。ジャンプしたらそのまま後ろに転がり、背
中を思いきり打ってしまった。人間とちがつて二本足で立つことには慣れていないから当然だ。
どうすればいい？

ぼくはあおむけに寝転がったまま、頭をフル回転させた。
ハルナ先生のことか心配だ。
気を失う直前、ぼくは男の声を耳にした。

——メサイア様、おいつけのとおり、女をとらえました。
あれはきつとハルナ先生のことだ。そして、続けて聞こえてきたのはしわがれた老人の声だつ
た。

——私のじやまをする者はひとり残らず消えてもらおう。
たぶん、あれはメサイアの声。雑音混じりだったから、そこにいたわけではなく、無線機を通
して聞こえてきたのだろう。

——メサイアは僕とちがつて、本当に情けようしやないヤツだ。

昨日、〈まんぷく食堂〉でクロさんがいった言葉を思い出す。

——君たちなんてあつという間にやられてしまふだろう。

こんなところでもたまたましているわけにはいかない。一刻も早くハルナ先生を助け出さなければ。

ぼくの名前はタケル。

ヤマトタケルノミコトに姿が似ているからとお母さんが名付けてくれた。

最近になって、お父さんの持つっている本でこつそり調べてみたら、ヤマトタケルはものすごく強く、そして勇敢な男だった。

数々の戦いに勝利し、人の肉を食らうヤマトノオロチというおそろしい怪物までたおしている。

そんな男と同じ名前を持つているのだから、ぼくだつてきつとできるはずだ。

ぼくはからだを起こすと、暗やみをまっすぐにらみつけた。

ここから脱出する方法を懸命に考える。

すると突然、

「桜田さん……どうしました？」

ひろし君の声が耳に届いた。